

林田慎之助

魯迅のなかの古典

創文社刊

林田慎之助

魯迅のなかの古典

創
文
社
刊

林田 慎之助（はやしだ・しんのすけ）

1932年福岡県に生まれる。文学博士。1963年九州大学大学院文学研究科博士課程修了。九州大学文学部教授を経て現在神戸女子大学文学部教授。

〔著書〕『中国中世文学評論史』『中国文学の底に流れるもの』（以上創文社）、『柳宗元』『司馬遷』『諸葛孔明』『北京物語』『人間三国志・全六巻』『三国志風と雲と竜』（以上集英社）『孔明の人材学』（こま書房）等。

現住所 北九州市小倉南区湯川2-12-10

魯迅のなかの古典

一九八一年二月二〇日 第一刷発行
一九九六年二月二〇日 第二刷発行

著 者 林田 慎之助

発 行 者 久保井 浩 俊

発 行 所

株式会社 創 文 社

102千代田区麴町二一六・七
〇三三二六三七一〇一

（著者との申し合せにより検印省略）

晝印刷・鈴木製本

ISBN4-423-90016-5 Printed in Japan

魯迅のなかの古典
目次

橋梁の一木一石

——『墳』の後に記す——

郷党の先賢たち

——『会稽郡故書雜集』——

内に燃ゆる校勘

——『嵇康集』——

小説の思想

——『中国小説史略』——

未完の文学史

——『漢文学史綱要』——

復讐奇譚の取材源

——『故事新編』の「鑄劍」——

三

二三

三

六二

二七

二四

虚偽憎惡の心眼

一四

——「魏晉の氣風及び文章と藥及び酒との關係」——

よみがえる隱逸詩人

一八

——魯迅の陶淵明像——

寓言と修辭

二三

——魯迅のみた莊子と屈原——

風雅への挑戦

二三

——魯迅の明代小品文批判——

藤野先生に関する新資料紹介

二七

——『朝花夕拾』の「藤野先生」——

あとがき

二六

今ひとつのあとがき

二九

魯迅のなかの古典

橋梁の一木一石

——『墳』の後に記す——

—

この書物は、革命文学者魯迅の思想と行動を語ることをねらいとしたものでもなければ、魯迅の文学作品の世界にわけ入り、その文学創造力の特質を分析しようとしたところみたくもない。

或いはまた新出の資料にもとづいて、魯迅の克明な評伝を書こうとしたものでもない。書物の表題からも窺えるように、古典文学者魯迅、つまり中国古典文学を研究することに頗る熱心であった学者魯迅の軌跡をたどり、彼の古典に関する思想的視座をあきらかにしたいと考えたものである。

もし友人の銭玄同が魯迅に小説をかくことをすすめることがなかったならば、小説家魯迅の存在はなく、彼は本来好きな古典文学研究にその生涯をささげたであろうことはたしかである。繰り返し言うならば、魯迅があのような激動の時代に生き遇うことがなかったならば、おそらく彼

は重厚且つ平心な中国古典文学の研究者として、多大の業績をのこして、静かにその生涯を終えたであらう。

魯迅がのこした小説・雜感文の仕事にくらべると、彼の中国古典文学研究の成果はそれほど量とはいえないが、その質においていえば、小説・雜感文の類に勝るとも、けつして劣つてはいない。しかも、彼が小説の創作と論争の合い間を縫うようにして、孜々としておこなった古典文学研究の成果は今日なお内外の後進の研究に大きな影響をあたえつづけている。

『中国小説史略』『漢文学史綱要』『中国小説の歴史的變遷』など文学史に関する研究著書、『古小説鉤沈』『会稽郡故書雜集』などの古逸書蒐集に関する資料著書、『嵇康集』『唐宋伝奇集』『小説旧聞鈔』などの編著、『百喻經』の翻刻など現在までに刊行をみたものだけでも大変な量と質をあわせもつ研究成果である。文学史研究家として必要な極めて該博な学識と透徹せる見識、古逸書蒐集及び校勘編本に必要な独特の鋭敏な臭覚、緻密な神経、集中的な精神力のいずれにおいても、学者としての魯迅の資質は卓抜であつた。そうした古典文学者魯迅を語らねば、魯迅の生涯とその文学的営為の總体をはかることはできないはずなのに、これまで、そのことに光をあて、そのことを正面から見すえて論じたものは、ほとんど皆無にひとしい状態であつた。かつて中国の学者王瑤に『魯迅と中国文学』と題した小冊子があり、これが魯迅の古典文学に関心をよ

せた最初の論著であつたと思われるが、魯迅が古典文学の遺産をどのような方法態度で吸収にとめたか、彼の鋭利な雜感文がどの時代の古典文学の影響のなかにあつたかを概括的に論じただけのものであつて、彼の古典文学研究の一々にわたつての個別的な営為を分析して、魯迅に一貫する文学的態度の究明に及ぶものではなかつた。

つい最近のことであるが、『魯迅と中国古典文学』という書物を中国出版物の書目の中にみつけたので、早速これを取り寄せてみたが、魯迅の古典文学に関する發言を主に彼の雜感文のなかから抜き出し、それを時代別にわけ、作品作家の項目類にくくつてならべただけの編集もので、そうした知識の断片では、魯迅の古典文学研究をほんとうに知悉することは不可能だと思ひ、すくなくからず失望させられた。しかしながら、こうした書物が最近になつて中国で出版されてきたことは、古典文学者魯迅に関心をみせるほどの余裕が、かの地に生じた事情を物語るものであるとすれば、やはり歓迎すべき傾向といえるであらう。

拙著は、彼の故郷会稽郡の賢者や景物のことをしるせる魏晉六朝時代の古書の逸文を蒐集した『会稽郡故書雜集』の編集過程とそのモチーフをおさえ、中国小説史を論じたものとしてはじめての『中国小説史略』にみえる彼の小説觀を清末以来の小説の思想のなかでとらえ、彼が精密な校勘をほどとして新たに編纂した魏末晉初の異端詩人の詩文集『嵇康集』が、校勘の作業を

とおして魯迅に語りかけたものが何であったかを考え、厦門大学、中山大学の講義録であった『漢文学史綱要』から、彼の古代文学史試論と未完の文学史の構想を引きだし、『故事新編』のなかの一種の歴史小説ともいえる「鑄劍」の取材源をさがし、魏晉時代の文学と思想を縦横に語った講演「魏晉の風氣及び文章と藥及び酒との關係」から、魯迅における政治と文学の課題をとりあげ、魯迅の描いた陶淵明像がいかなるものであり、魯迅の明末小品文批判と彼の野史観がいかなる情況のもとで、いかなる現実的課題とむきあっていたかを考え、そのことどもを、私なりの覚え書にしたたものである。

こうして魯迅の古典研究の軌跡を追求してみて、これがどれだけ魯迅の文学と思想の核心に迫りえたかは、私の関知するところではない。それを語る人は別にいて、その人々の参考と傍証に、なんらかの意味で拙著が役に立てば、私はそれでよしと考えている。

二

かくも多彩に中国の古典文学に関心をもち、その探究に熱心であった魯迅が、一方では青年たちにもわかってなるべく中国の古い書物を読むなと説いたのは矛盾であらうか。それはことばの表

層においてとらえれば、あきらかに矛盾である。そのことを考える際、魯迅のなかで、その矛盾がどれだけの苦痛であがなわれたものであったかが問題であり、その矛盾がどれほどの優しさをはらんでいたかが問題である。魏晉の鼎革期に生き、竹林の七賢の仲間でもあった阮籍・嵇康は放胆で反逆的な異端の言動をみせたが、彼らは自分の子供たちにはかかる言動をけつしてのぞまなかった。そのことを魯迅が見逃さなかったところに、彼もまた阮籍・嵇康とおなじように、自からの苦痛であがなった者だけが、その矛盾をおそれずにみせる優しさがある。その意味でかつて小川環樹氏が「魯迅の古典研究」という論文の結びで、「かれが古典に対して傾けた熱情と、かれが中国の青年の前途に対していただいた愛情とは、決して別個のものではなかったのである」（魯迅選集）と語っているのは、傾聴にあたいるであらう。

魯迅に「『墳』の後に記す」というエッセイがある。『墳』と題した雑感集を編んだことで、後悔に身をゆする魯迅はつぎのようなことを語っている。

それにつけて思い出すのは三四年前のことだが、ある学生が私の本を買いに来て、ポケットから銭をとり出して私の掌中においたことがあった。その銭にはまだ体温が残っていた。この体温が私の心に焼きついてしまって、いまでも文章を書こうとするときは、かならず、こうした青年に害毒を与えはしないかという不安に駆られ、筆を執るのがためらわれがちな

る。

学生が手渡した錢に体温がのこっていて、その体温を心に烙やきつける魯迅は不安に駆られてゐる。その不安が『墳』を出版にまわしたのちの後悔につながっている。かつて古書を沢山読み、古人の亡霊を背負って、それから脱却できない自分の書く文章なり、文字なりが、未来に生きる青年学生に害毒をあたえるのではないかという不安である。実はそこに魯迅の矛盾があり、その矛盾が矛盾としてはらむ悲哀と緊張のなかに、魯迅が実在している。古書と古人の亡霊を背負って、それから脱却できぬ苦しみとあらがいが、そのまま魯迅の思想と文学の実在性であるともいえるものがそこにある。

魯迅は端境期はぎかいの文学者である。前近代と近代が入れ替り、交錯するいわば転換期の文学者である。このことは、中国の古典文学にむきあい、中国の伝統文化とむきあう魯迅の態度を考える場合、重要な意味をもつ。誰しも人間はその生きた時代を生きつづける以外にはない。魯迅はその生きた時代を生きることにおいて、まことに誠実であった。その意味で、魯迅はもともと転換期にふさわしい文学者の性格を具えていた。その性格を魯迅みずからに語らしむれば、それはヌエ的な作家としか、外にいいようのない性質のものであった。

文章改革の発端の時期にあっては、ヌエ的な幾人かの作家が現われるのは当然であり、そう

なるより仕方がないし、またそうなることが必要である。彼の任務は多少の覚醒のあとで、
ともかく新しい声で叫び出すことにある。しかも旧陣営からでて来て情況に比較的あかるい
から、戈をひるがえして一撃すれば、強敵の死命を制するのはそれだけ容易である。しかし
それにしても光陰とともに去って、やがて消滅すべきものであることには変りはなく、せい
ぜい橋梁の一木一石にすぎず、前途の目標とか手本などではけっしてない。

端境期のヌエ的な作家であることを、どれだけ自覺的にとらえているかどうかによって、ヌエ
的な作家の存在理由は決定される。古書と古人の亡霊を背負って、それから脱却できない自己否
定の道を通して、魯迅は未来にむきあうしか、彼が生きぬく方法はなかったともいえる。

魯迅が生まれたのは一八八一年である。明治十四年といえばわかりやすいが、中国では清の光
緒七年にあたる。当時の中国では、読書人の子弟は科挙の試験を受けて官吏になるのが、いまだ
なお出世の道であった。そのため幼い時から経書を暗誦し、八股文を書く文章技術を磨く訓練を
した。それがあたりまえのことであつたのだ。読書人の家に生れた魯迅は幼少期から、そうした
教育の洗礼をぞんぶんに受けて育つたのである。たしか「民国十四年の『経書のすすめ』とい
う雑感文のなかで、魯迅が私はほとんど十三経を読んだと語っていたのを憶えている。専門の経
学家ならばいざしらず、現代の中国学の研究者で十三経のほとんどを読んだといえる人はまず

あるまい。それほど十三經は難解で、その意味の把握には膨大な注疏を必要とするからである。十三經の本文を暗誦し、その大体の意味をとるかたちで、魯迅が目をとおしたにしろ、それは大変な時間と努力を要したであらう。読書人の子弟で科擧の試験を志す者にとって、十三經は必読暗誦の書であつたのである。

魯迅の世代の古典受容は本人が好むと好まざるとにかかわらず、必要条件が優先するかたちでおこなわれた。そうした古典受容でもやはり受容者に大きな影響を与えずにはおかぬ性質のものであつた。自分のなかには、古いことばが、古いことばをとおして語りかける古い思想が存在していると、魯迅みずから語り、古い強敵の死命を容易に制することができる古い陣營に身をおく自分は、新しい陣營への橋梁の一木一石であるにすぎないと、魯迅がみずからを語るとき、彼がメエ的な作家として、いかに対面している轉換期を自覺的に生きること、誠実であらうとしたかを知るのであらう。

思うに、古典文学者魯迅には一種の禁欲的な方法が対象操作にあり、資料を厳密に読みとり、その読みとつた資料に多く語らせ、みずからの解説をひかえる態度がある。それは同時代に生きた郭沫若のそのときおりの情熱からでた古典研究とは、異なるところであつた。しかしながら、魯迅がとりあげた古典文学もまた、あの激動する中国の轉換期を自覺的に生きることにおいて誠

実であつた人間がみずからえらびとつた対象であつた。したがつて、彼の中国古典文学との対応のなかには、必ずしも趣味趣向が先にあつてでてきたものとは到底いえぬ、自覚的で積極的なかわりが存在した。そうした魯迅の積極的な古典文学とのかかわりを、具体的に描いてみたいというのが、この拙著を構想するにあたつての私のかねてからのひそかなねらいであつた。